

MIS036-P32

会場: コンベンションホール

時間: 5月26日 14:15-16:15

## 遠地実体波解析による東北地方太平洋沖地震震源域の特徴 Source processes of the 2011 Tohoku-Taiheiyo-oki earthquake inferred from teleseismic body waves

山中 佳子<sup>1\*</sup>, 吉本昌弘<sup>1</sup>

Yoshiko Yamanaka<sup>1\*</sup>, Masahiro YOSHIMOTO<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 名古屋大学環境学研究科

<sup>1</sup> Nagoya Univ.

IRIS-DMC から収集した広帯域地震計記録を用いプレートの形状を多少考慮して震源過程解析を行った。その結果、以下のようなことが考えられる。

\* 大きなすべりは破壊開始点より深いところ（震源より北東）と南東の海溝付近だった。海溝側のすべりが津波を大きくしたものと思われる。今回の地震は数多くのアスペリティの連動破壊であった。

\* 余震の多くは福島 - 茨城沖の陸よりの多く起こっており、今回求められた結果では余震がたくさん起こっている所での本震時のすべりはほとんどなかった。

\* 本震の2日前に M7 クラスの地震が発生したが、そこを避けるように今回の地震のすべりは北側、南側に進展した。

\* 1896 年明治三陸地震（津波地震）の震源は今回の海溝付近北側の大きなすべりのすぐそばである。明治三陸地震の震源域についてはまだよくわかっていないが、今回の震源域の一部の可能性が高く、この領域では津波地震に見られるようなゆっくりとした破壊が起こっている。

\* 今回の地震では 1968 年十勝沖地震のすぐ近くまで滑ったことがわかる。

\* 1978 年宮城沖地震のところは発生確率の高かったところだが、今回この付近で 2 - 3 m の滑りが見られることから想定宮城沖地震の震源域も滑ったと考えられる。

\* 海溝側の南側のすべりのさらに南側は日頃から地震活動が低い領域であり、そのさらに南側には沈み込んだ海山がある。

キーワード: 東北太平洋沖地震